

原 著

## ミルトンにおける死 (1)

武 村 早 苗

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科

(平成6年4月20日受理)

### Death in Milton (1)

Sanae TAKEMURA

*Department of Medical Social Work,  
Faculty of Medical Welfare  
Kawasaki University of Medical Welfare  
Kurashiki, 701-01, Japan  
(Accepted Apr. 20, 1994)*

**Key words** : death, pestilence, classical images, Christian images, heaven

#### Abstract

When he was seventeen, John Milton wrote four Latin poems to mourn the death of Cambridge people. I am going to examine how Milton described Death and also to discuss the images in each poem.

#### 要 約

ミルトンは17歳のときに4つのラテン語の追悼詩を書いている。対象はすべて、彼が在学していたケンブリッジ大学に関係する人々である。これらの追悼詩の中で「死」がどのように描かれているか、また、いかなるイメージが用いられているかを考察する。

#### はじめに

シェイクスピアの悲劇を読むと、次から次へと登場人物が殺されたり、あるいは自殺するので、劇とはいえ、そんなに簡単に登場人物を殺してもよいものかと、現代の読者の中には驚く人もいる。たしかに彼の作品においては、死に至らないまでも、死を連想させるセリフが日常

の会話にごく自然に表われる。たとえば、ジュリエットが、親が決めた相手と結婚するのを拒絶したとき、キャピュレット夫人のセリフは、「このおばかさん、墓とでも結婚すればよい」<sup>1)</sup>である。シェイクスピアのこの傾向はエリザベス朝の時代精神と関係があると思われるが、今は触れないでおく。本稿ではシェイクスピアより44年遅れてこの世に生を受けた John Milton

(1608—74)の文学において、死がどのように描かれているかを考察したい。

1350年から1720年にわたって、少なくとも30年ごとに Black Death (黒死病、ペスト) と呼ばれる疫病がヨーロッパに現われている<sup>2)</sup>。当時の銅版画には、あまりにも多くの人が死んで、葬式はおろか、自分の死骸を運んで土に埋めてくれる人手もないので、死にかけている本人が、すでに掘られている共同の墓穴に、みずから転りこむような悲惨な場面が描かれている。

さて、ロンドンにおいては、疫病は1625年—ミルトンがケンブリッジ大学に入学した年である—5月に始まった。最初の頃は週平均の死亡者は45人であったが、6月、7月と増えつづけて2,471人にまでのぼった。1625年の疫病のために、35,000人、実にロンドンの人口の少なくとも1/6が失われたのであった。ケンブリッジにおいても、大きな催しは取り止めになり、教師も学生も大学にこもらざるをえなかったが、幸いにして、この町は疫病をまぬがれた。ちょうど夏休みであったため、ミルトンはロンドンかどこかで両親と休暇を過していたようである<sup>3)</sup>。このような雰囲気の中で、彼は大学の2年目をむかえた。彼はこの年、追悼の詩を4篇書いた。いずれもラテン語で書かれている。当時のヨーロッパ世界の共通語はラテン語であったから、法学を学ぶにしろ文学を学ぶにしろ、ラテン語の高度な知識が必要とされた。ましてや詩人を志している青年なら、ラテン語で詩を書く機会を逃すことはなかったであろう。一篇ずつ検討したい。

1. エレジーII: 「ケンブリッジ大学の儀式担当者の死に寄せて」(*Elegy II: "On the Death of the Beadle of Cambridge University"*)<sup>4)</sup>

輝く杖を手にした、ひときわ目立つ姿のあなたは幾度も学生を召集するのに慣れていた。その呼びだし役のあなたすらをも、最後の呼びだし役である死が運び去った。自分の仕事になんらの好意も示さずに、ゼウスが身をや

つしたという白鳥よりも、あなたの髪は白いけれど、ヒーモニアの秘薬によって若返り、イアソンと同じほど長生きするにふさわしい。アイスクラピウスの医術によって、三途の川から呼び戻されるにふさわしい。

いと速き使者よ、学生を集めよと副総長から命ぜられたとき、あなたは、父ゼウスの城から派遣されて、トロイの宮殿に立ったときの、足に翼のあるヘルメスのようであった。

あるいは怒れるアキレスの前に、主人アガムノン<sup>5)</sup>の厳しい命令を伝えたエウリベイツのようであった。

墓の偉大な女主よ、アヴェルヌスの侍女よ、一詩人にとっても大学にとっても、あまりに残酷な一。どうして汝は地上の無駄な重荷である人々を連れ去らないのか。汝がその矢で射るべきは群衆である。

こういうわけだから、大学よ、黒衣に身をこめて彼の死を悼め。黒い棺を涙でぬらせ。愁いに沈むエレジーに悲しい調べをあふれさせ、葬送の歌を大学中にひびかしめよ。

このエレジーは、30年間にわたって、ケンブリッジ大学の儀式担当者を務めた Richard Ridding (d. 1626) の死を題材にしている。Ridding について詩人が最も関心を持っているのは、彼の職業である。ここには当時の大学の儀式担当者の役目が具体的に描かれている。儀式において、彼は大学総長の職権の象徴である杖 (mace) を掲げて、晴れ舞台を務めたことであろう。ミルトンも「尊敬すべき絵になる人物」<sup>5)</sup>の姿を何度か見たことだろう。

あるいは儀式の担当者は声を張りあげて、名前を呼ぶのが常である。呼びだし役について述べられた詩行は、英語訳では 'even you, the Beadle, remorseless Death, the last of beadles, has carried off, shwing no favor to her own office.' となっている。人生においては、

良きにつけ悪しきにつけ、人は呼びだされることが多いわけであるが、数ある呼びだし役の最後の呼びだし役が死なのである。ここでは、最後の呼びだし役が生きている呼びだし役を召集したのである。Ridding と同じ職業なのだから、死が彼のことを少しは大目に見てくれて、彼女の職権をそれほど無情にふりかざさなくてもよいものを... と詩人は嘆いている。

Ridding にもっと長生きしてほしいと歌っている所では、白鳥に姿を変えて、スパルタ王の妻レーダに言い寄ったゼウスの神話と、魔法の土地、ヒーモニアの薬草を用いて、恋人イアソンを若返らせたメディアの神話が紹介される。2つのやゝなまめかしい神話には、永遠のイメージ（ゼウスとヒーモニア）と空間的広がり（白鳥）の効果がある。もしもこのエピソードが省かれていたならば、このエレジーは職業人としての Ridding しか描いていないことになってバランスが悪い。このエピソードにより、彼が暖い血のかよった人間であることが暗示されて、読者は安らぎをうる。

死は人格化されていて女性である。墓を支配する女王（Great Queen of Sepulchers）あるいはアヴェルヌスの侍女（servant of Avernus）と呼ばれている。ナポリの近くのアヴェルヌス湖は黄泉の国への入口であると考えられていたので、アヴェルヌスとは黄泉の国をさす<sup>6)</sup>。死は黄泉の国の侍女なのである。死の女神は弓矢を持っていて、彼女の矢にあたると人は死ぬ。

詩人は死の女神に詰問する。どうして汝は地上の役たたずの重荷（a useless burden to the earth）を死者の国へ送らないのかと。役たたずの重荷とは群衆のことである。若い詩人にとって、大衆はいとわしいものなのか。いずれにしろ、彼が大衆のことを良く思っていないことは明らかである。Elegy II はミルトンの貴族主義的気質をわずかではあるが、明確に表わしている。

## 2. エレジー III：「ウィンチェスターの主教の死に寄せて」(Elegy III: "On the Death of the Bishop of Winchester")

ウィンチェスターの主教 Lancelot Andrews (1555-September 25, 1626) は当代で最も著名な牧師であった。彼は『欽定訳聖書』(1611) の翻訳者の一人であり、過去にはケンブリッジの Master でもあった。Elegy III のあらすじは次のようである。

詩人が独りで淋しくたたずんでいると、最近英国を襲った疫病と疫病の犠牲になった多くのイギリス人のことが思われた。つぎに、北海沿岸の国々へ遠征し、雄々しく戦って亡くなった祖国の英雄たちのことが思い出された。しかし、詩人にとって最も悲しむべきは、立派な主教の死であった。詩人は死神に文句を言う。汝は自然界に猛威をふるって、植物や動物をえじきにするだけでは満足できないのか。なぜ人類をも破滅させようとするのかと。そのうちに詩人は眠ってしまう。夢の中で彼はえもいわれぬ美しい所を歩いている。そうして主教に会う。すると、こころよい音楽が流れて、天使の群れが主教を歓迎しようとやってきた。詩人は主教とともに天国にいたのだった。

Elegy III は疫病を正面から捉えた作品である。死神の名は Libitina。死者をつかさどる古代イタリアの女神である。Libitina によって疫病がイギリスの地に上陸し、大理石でできた立派な人々の宮殿（great men's palaces）に入り、黄金と碧玉で飾られた重い壁をノックし、多くの貴族（troops of nobles）を死神の鎌で刈りとった。その中には30年戦争で功績のあった人たちも含まれていて、彼等の骨が時ならずして火葬用のマキの上で焼かれた（consumed on untimely pyres）。

疫病は森や野原を汚し、その有害な息（pestilential breath）の下で、百合もクロッカスもバラも枯れた。樅の木は病み、小鳥も、暗い森をさまよう多くの動物も、海に住む物言わぬ群れ（dumb herd）も死神の犠牲になった、と詩人は悲しんで歌う。

以上のような人間界と自然界の描写によって、我々は1625～6年のロンドンの空気を想像することができる。ここにはロンドンの惨状についてのリアリスティックな描写はないけれども、ロンドン全体を海の中までおおう疫病の害毒—

一さしずめ現代なら有毒ガスの公害とでも言えようか——の息がつまりそうな雰囲気を感じられる。そうして死は有名な愛国者たちの生命を奪っていくのである。「宮殿に入り」「壁をノックし」「鎌で刈りとる」という表現には、死神が追ったてる恐怖と伝染病のイメージがある。植物や動物の死とならんで貴族の死が扱われているが、庶民の死は問題にされていない。詩人はやはり大衆を避けているのだろうか。あるいは大衆はエレジーにはふさわしくないのか。興味深いことである。

つぎに天国の様子を見てみよう。天国ではすべてがバラ色の光 (rosy light) に浸されている。地面は虹の色でさまざまな花が咲いている。銀色の流れ (silver streams) が春の緑野を洗い、黄色の砂はタグス河の黄金の砂よりも濃い色だ。そこへ優しい西風が訪れて、数えきれないバラの下で生まれた湿った息吹 (a moist breath born under myriads of roses) をこっそりと奪う。ガンジスの岸辺にある太陽の住みかもここに似ているとか、主教の顔は星の光 (starry light) を放ち、輝く白いローブ (a shining white robe) が黄金のサンダル (his golden sandals) へとなびいていた。その立派な老人が歩くと花の地面が震えて喜びの音をたて、天使たちは宝石で飾られた翼であいさつした。清らかな空気 (pure air) にトランペットが鳴りひびき、天使の群れがハーブに触れた。一人の天使が主教に言った。「ようこそ、神の国の至福を楽しみなさい。これからは下界の苦勞を忘れて永遠に休みなさい。」と。

汚染されたロンドンとは反対に、詩人は美しいイメージをあふれんばかりに連ねていく。バラ色の光、虹色の地面、銀の流れ、緑の野原、黄色い砂、輝く白いローブ、黄金のサンダル、数えきれないほどのバラの香り、花の地面、天使の歌、トランペット、ハーブというふうの色と香りと音で読者を酔わせる。天国はゴージャスの一言につきる。

*Elegy II* においては、ミルトンはギリシャ神話の古典的イメージのみを用いているが、*Elegy III* では古典的イメージとキリスト教的イメージを共存させている。死や疫病については、もっ

ばら古典的イメージが使われる。天国についても、自然の豊かさや色における華やかさを描くときは、古典的イメージが重宝されているようだ。*Elegy III* のイメージについて Maclean は述べている。

In *Elegy III* Christian images supercede the classical vision, but do not banish the images of the classical story.... The Christian victory, so to speak, contains or even (for its fullest effect) depends upon the continued presence of the classical elements, which imaginatively, take their place in the eternal scheme.<sup>7)</sup>

すなわち、古典的要素が作品の中にたえず存在しているので、最後の天国の場面においてすら、古典的イメージはキリスト教的イメージを強める役割を果していると解釈できよう。

現世における主教の職業についての言及はないけれども、詩人の夢の中で主教は天使になる。いわば、彼は「神格化される<sup>8)</sup>」。聖職者としてこれ以上の榮譽はないであろう。

### 3. 「エリーの主教の死に寄せて」 (“On the Death of the Bishop of Ely”)

Nicholas Felton (1556–October 5, 1626) がその人である。前述の Lancelot Andrews とよく似た経歴の持主である。Felton は Andrews より名が知られていないが、善良で学究的な人物であり、説教師として有名であった。Felton は Andrews の死の10日後に亡くなった。追悼詩のあらすじは次のようである。

ウインチェスターの主教の死を嘆く涙も乾かないうちに、詩人はエリーの主教が亡くなったとの噂を聞いた。いつものように彼が激しく死神を攻撃していると、どこからか声がして次のように言うのだった。「死神は君が思っている

ような陰気なものではない。彼女は善き魂を天上に送り、悪しきものを地獄へ追いやるのだ。彼女に呼ばれて私の魂が喜んで応じると、私は空高く運ばれて、天国の門まで宇宙を旅行したのだよ。」と、声の主はエリーの主教であった。

この詩では、詩人に向けて Felton が語るスピーチに注目したい。死に関する部分を引用してみよう。

Death is not, as you in your wreched delusion think, the black daughter of Night, nor of Erebus, nor of Erinys, nor was she born of vast Chaos. But, sent from starry heaven, she everywhere gathers in the harvest of God. Souls hidden within a mass of flesh she calls forth into the presence of eternal Father. But the wicked she justly carries down to... the infernal habitation. When with joy I heard her calling, I quickly left my foul prison.

スピーチは死神についての弁護で始まる。死は、従来考えられていたような、夜や混沌から生まれたものではない。実は天から送られて来て神の収穫物を集めるのが彼女の仕事である。死は善きもので、いわば神の代理人である。さらに、彼女は人間の身体に隠れている魂を明るみへ呼び出す。主教の魂も呼ばれて「いまわしい牢獄」をすぐさま出ていく。身体は不純なもので魂は浄らかなもの、美しい魂が汚れた身体 (= 牢獄) に閉じこめられているという考えは、明らかにプラトンのものである。死の役目はもうひとつある。彼女は善い魂と悪い魂を正しく見分けて、善い魂を神の前に、悪い魂を地獄へ送るのである。亡き主教に敬意を表するため、死についての異教教的見解が拒否され、死神はキリスト教的性格を帯びることになった。<sup>9)</sup>

空に昇った主教の魂は、牛飼座、さそり座、オリオン座を巡り、太陽のそばを通った。はるか下の方には月が見えた。銀河や惑星の間を速いスピードで通りぬけ、ついにオリンパス (=

天国) の輝く門にたどり着いた。最後の場面は次のように描かれている。

Through the ranks of the wandering stars, through the Milky Way, I was borne, often marveling at my strange speed, until I reached the shining doors of Olympus and the crystalline palace, the court paved with emeralds.

この追悼詩も主教に捧げられるのにふさわしく、最後は天国の話で終わっている。しかし、「ミルトンは天国の描写をくり返すのはやめて、その代わりに主教が天国の入口まで宇宙旅行をするという話を工夫をこらして作った。」<sup>10)</sup>と Hanford は述べている。

#### 4. 「大学の副総長・医師の死に寄せて」 (“On the Death of the Vice-Chancellor, A physician”)

Dr. John Gostlin (1566? –1626) はケンブリッジ大学の Medicine の教授であり、ミルトンが在学していた時の副総長でもあった。というのは副総長は毎年選挙によって決められる地位であったから。冒頭から詩人は命令する。人類よ、運命の掟に従うことを知り、運命の女神に懇願せよ。いったん死神が地獄の口から現われて、あなたを呼んだら、ぐずぐずしたり策略をめぐらすことは無駄である。地獄への旅は避けられないのだ。続けて彼は人間の力や魔法や医術や薬草が、死に対していかに無力であったかを、ヘラクレス、ヘクター、キルケー、メディアなどの神話上の人物を例にあげて説明する。

そうして、この大学の統治がまかされていたあなたよ、と Gostlin に言う。とりわけ医術と薬草が運命の女神を欺くことができたなら、あなたは生きて、これまでどうり立派に大学を司ることができただろうに、地獄の渡し守のはし

けで恐ろしい河を横切らなくてもよかったのに、と嘆く、しかし、あまりにも多くの死に瀕している人々を医術と薬によって救ったので、死者の女王であるプロセルピナが怒って、あなたの生命の糸を切ったのだ、と Gostlin の死の原因をプロセルピナの恨みのせいにする。

前の3篇の追悼詩とは調子が変わり、厳しく現実的な内容である。所詮人間は死ぬものである。医者としてもその運命は避けられない。現代の言葉にすれば、死を受容せよという主張である。Ridding の場合と同じように、医師という職業にポイントがおかれている。Ridding の場合は呼びだし役という、死と共通の職業であり、Gostlin の場合は医者と死の女神は敵対関係にある。最後の数行を引用してみよう。

Reverend Chancellor, may your limbs, I pray, rest in the soft turf, and from your grave may roses and marigolds grow, and the purple-lipped hyacinth. May Aeacus pronounce a mild judgment upon you, and Etnaeon Proserpine smile, and may you

walk forever among the blessed in the Elysian field.

詩人は、「敬愛する副総長よ」と呼びかけて、「どうか土の中で安らかにお休みください」とか「冥界の裁判官がおだやかな判決を下しますように」と願う。彼が副総長の墓から咲きいでよと願うバラとキンセンカと紫のヒヤシンスがつつましく色どりをそえるのみである。そうして「天国において祝福されたものの中を永遠に歩かれますように」で終わっている。

本稿で取りあげた4つの追悼詩は、いずれもミルトンの個人的な感情から書かれたものではない、とどの注釈書も述べている。しかし、4番目の追悼詩の雰囲気は暗くて重々しく、読者の気持を和らげるような甘やかな部分が非常に少ないので、ミルトンは Gostlin の死に最も心を動かされたのではないかと推察される。Tillyard は Gostlin への追悼詩の最後の詩行をさして、“The last verse has a dignity very remarkable in a writer only seventeen years of age.”<sup>11)</sup>と述べている。

## 文 献

- 1) 小田島雄志訳 ロミオとジュリエット、第三幕第五場。
- 2) Kiple FK (ed)(1993) *The Cambridge World History of Human Disease*, Cambridge University Press, New York, pp 281.
- 3) ロンドンの疫病についての記事は Masson David (1965) *The Life of John Milton*, Gloucester, Mass., vol. 1, pp 152-153 と Hunter WB (ed)(1978) *A Milton Encyclopedia*, Associated University Presses, Inc., New Jersey, vol. 3, pp 38を参照した。
- 4) ミルトンの詩の引用はすべて  
Bush Douglas (ed)(1965) *The Complete Poetical Works of John Milton*, Houghton Mifflin Company, Boston による。以後 *Poetical Works* と略する。
- 5) *Poetical Works*, pp 44.
- 6) Hughes MY (gen. ed)(1970) *A Variorum Commentary on the Poems of John Milton*, Routledge & Kegan Paul, London, vol. 1, pp 63. 以後 *Variorum Commentary* と略する。
- 7) *A Milton Encyclopedia*, vol. 3, pp 39.
- 8) *Ibid.*, vol. I, pp 47.
- 9) *Variorum Commentary* vol. 1, pp 204.
- 10) *Ibid.*, vol. 1, pp 201.
- 11) *Ibid.*, vol. 1, pp 160.